

(1)「不妊と人口」(組織者：小西祥子会員)

不妊に対する社会的関心が高まる一方で、人口学の視点からの研究はまだ少ないように思われる。欧米においては、例えば不妊治療の受診行動が集団の出生率に及ぼす影響や、運動や喫煙などの生活習慣が受胎待ち時間に及ぼす影響などが推定されている。しかし遺伝的素因や生活習慣、文化規範などが異なる日本においては、それらの影響が欧米集団と異なる可能性を否定できない。少子化の要因を解明するためにも、日本における不妊、すなわち人口学的にいえば妊孕力に関連する学術的知見を幅広く収集することが不可欠であると考え。そこで本セッションは、生物医学領域に限らず、経済学、社会学など多様なアプローチによる、人口学的視点に基づいた不妊に関する研究報告を募集したい。

(2)「東アジアにおける地域研究としての人口学」(組織者：鈴木透会員)

韓国・台湾等で世界で最も低い水準への出生力低下が進み、それによって世界最速の高齢化が予想される等、東アジアは人口研究において最も重要な地域となっている。この地域の高い教育熱は経済発展を支えたが、同時に結婚力・出生力低下を促進したと考えられる。儒教圏はもともと男尊女卑的な考え方が強かったが、現在のジェンダー平等度とその出生力への影響は、必ずしも明らかではない。ただし 1980 年代から続く出生性比の歪みが、結婚難や国際結婚に与える影響は、今後重要性を増すだろう。また近年の震災やナショナリズムの衝突が労働力移動や国際結婚移動に与える影響など、重要な研究課題には事欠かない。本セッションでは、人口研究のホットスポットになった東アジアに関する人口学的分析、特に日本との比較や日本に対する示唆を含む報告を募集する。

(3)「カイロ会議を再考する - カイロ + 20 へ向けてリプロダクティブ・ヘルス、ライツの過去・現在・未来」(組織者：谷口真由美会員)

2014 年は、人口関連の研究者にとっても意義深いカイロ会議から 20 年となる。カイロ会議が開催された 1994 年は、その前後にも国際連合（国連）主催の大きな国際会議が毎年のように開催された。例えば、1992 年には環境と開発に関する国際連合会議（通称：リオ会議 もしくは 地球サミット）1993 年には世界人権会議（通称：ウィーン会議）1994 年には国際人口開発会議（通称：カイロ会議）1995 年には第 4 回世界女性会議（通称：北京会議）などである。

その後の世界の流れは、すべて大きな国際会議は開催されず、それぞれの会議をレビューするという形で行われている。2012 年には、リオ + 20 が開催されたが、ここで「リプロダクティブ・ライツ」は大きな危機に立たされた。それは、合意文書から「リプロダクティブ・ライツ」という文言が全て消えた、ということである。

世界中のリプロダクティブ・ライツや女性問題に関連する人たちは、実はこの「リプロダクティブ・ライツ」に対する逆襲を恐れ、2000 年代に入ってから積極的に世界会議を推進してこなかったのである。

それでは、カイロ会議で定義がなされた「リプロダクティブ・ヘルス」や「リプロダクティブ・ライツ」とは何であったのか？当時の合意に至る道のり、またその後の国際社会や日本国内での当該概念の受容のされ方、また未来への見通しはどうであるのか、人口学会という場所で再考してみたい。